SONA International Convention 2023 ラウンドテーブル

2023年1月18日～20日　ネパール・カトマンズ

「Role of architecture in the creation of identity of the contemporary city」をテーマとしたSONA（ネパール建築家協会）International Conventionが、2023年1月19日から20日まで、ネパールのカトマンズで開催されました。大会日程に合わせ、18日にARCASIA（アルカジア：アジア建築家評議会）のACPP（職能委員会）、ACGSA（環境建築委員会）、ACYA（次世代委員会）の3つの委員会のラウンドテーブルとクロス・コミッティー・ミーティング（合同委員会）が開催されました。

開催地：　ネパール、カトマンズ
期　間：　2023年1月18日～20日
参加者：　竹馬大二国際委員長・ACPP委員、新居照和ACGSA委員、新居ヴァサンティ ACGSA委員会オブサーバー、伊藤友紀ACYA委員

スケジュール：
1月18日　ラウンドテーブル、クロス・コミッティー・ミーティング
1月19日　SONA International Convention 2023 1日目
1月20日　SONA International Convention 2023 2日目

アブサイードARCASIA会長とJIAからの出席者

クロス・コミッティー・ミーティング 職能委員会（ACPP）

竹馬大二（国際委員長／国際委員会ACPP委員）

●クロス・コミッティー・ミーティング

クロス・コミッティー・ミーティング（Cross Committee Meeting）とは、複数の委員会を同時期に開催し、各委員会での討議内容を共有することで議論を深めることを目的として2021年から始められた。今回は開催時期が陰暦の正月であったことなどにより参加国は限られたが、UIAからは会長、副会長、事務総長が、ARCASIAからも会長と5つの委員会のトップが参加し、議論は大いに盛り上がった。

クロス・コミッティー・ミーティング 記念撮影

●ACPP

ACPP（アルカジア職能委員会）では、Sustainability in Professional Practice（建築設計事務所の持続可能性）をテーマとして、各国の発表が行われた。まず、各国からはこのテーマを阻害する要因として以下の課題が挙げられたが、これらは日本にも共通している問題を含んでいる。

- 建築学科の卒業生が設計事務所に就職しない。
- 建築教育課程で実務的な訓練ができておらず、学生に建築設計の必要性や魅力が伝わっていない。
- 設計事務所は薄給であり離職率が高い。
- デベロッパーが設計業務を内製するため設計事務所の関与が低下している。
- 無資格者（海外の建築家）により仕事が奪われている。

これに対して提案されたソリューションを下記にまとめるが、決め手には欠ける印象を持った。問題は深く、改善には時間を要する。

- 建築家の資格要件を3年の大学一般課程、2年の大学専門課程、2年の実務経験に変更する予定。Council of Architecture（資格認定機関）と議論を行い、教育と実務間のギャップを埋める方法を模索している（インド）。
- 実務でメンターシップを取り入れることを会員に推奨している。また、巨匠を頂点としたピラミッド型の構成ではなく、コラボ型の横連結をベースとした職能に変えていくための議論を行っている（バングラデシュ）。
- 実践教育（設計事務所と大学のコラボプロジェクトなど）の実施と若いアントロプルヌアーの育成に注力。また、Builder Mafiaと呼ばれる設計施工会社との差別化の活動を行っている（パキスタン）。
- 建築家の職能とビジネス領域を拡大することが必要。また、学生や若い設計者の興味を引くために、建築家のリーダーシップや社会貢献をアピールすることも重要。建築作品のみではなく建築家のさまざまな活動を顕彰し職能をプロモーションすべきである（日本）。
- 他の職能団体（設備、構造等）と連携し、フィーの向上、過度な競争の排除、新領域の開拓などの運動を行うべき。一方で

ACPP委員会

非建築家（無資格の海外設計者）のプロジェクト参入を防ぐことも必要。また、CPDの強化とライセンス授与後の試験の実施を検討中である（スリランカ）。

・建築家が建設産業のリーダーとして影響力を保持するためには発注段階での関与を保つ必要がある。また、先端的設計手法（AI含む）の導入の検討も必要（マレーシア）。

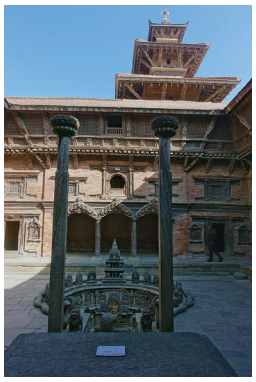
今回の委員会では課題共有にとどまっているため、継続して議論を行うことになった。JIAの職能・資格制度委員会とも連携していきたい。

（ちくば だいじ／日建設計）

グリーン・サステナブル建築委員会（ACGSA）

新居照和（国際委員会ACGSA委員）

2023年1月18日、午前10時から午後4時までカトマンズの会場でACGSAの円卓会議が行われた。中国圏の正月と重なったこと、会議は対面であったため、参加は6カ国、議長を含む11名が発表を行った。



復興したパタン王宮広場（上）
震災復興後に王宮が改修され美しいパタンミュージアムに（右）

●Resilient Architecture in Asia

テーマは、アジアにおける回復力ある建築。気候危機、自然破壊や激甚災害、資源の枯渇とエネルギー危機、これらの衝撃をどのように吸収し回復へ、新しい地平を見出すことを目的とする。複雑化した都市や農村部に、どのように対処していくか、変化を適応戦力に組み込めるかを焦点にしたいとする。

●参加6カ国11名の発表

ACGSAの課題を継承発展させていくために、現議長に留まらず、4代前からの議長も意見交換し、運営参加する。議長はインドのトゥシャール氏。世界の災害種類や件数、頻度、損失等を提示する。死者数はアジア環太平洋域が一番多く、南アジア地域が続く。参加国の経験を共有していくクライマゾンを提案した。前議長アチャ氏は各国の1人当たりのCO_2排出量を示し、エンボディドとオペレーショナルの二酸化炭素排出量削減を語る。前前々議長カジ氏からは、生命倫理バイオエシクス、自然のモデルを研究していくバイオミミクリー、自然の生態から建築原理を見出し、持続可能性を探るバイオミメチック建築という言葉が紹介され、印象に残る。

以下、各委員の発表である。インドはインドにおけるレジリエント建築とはどういうものかを問い、熱波、海岸領域の洪水と海面上昇、サイクロンと強風、干ばつに対する建築的知恵を示す。ネパールは、レジリエント建築は広域に捉えることであり、社会生態学、レジリエンス、均衡、適応性がキーワードになると語る。バングラデシュは、開発と成長による社会、暮らしの大変化と地震、洪水、サイクロン等の自然災害が合わさって、居住、環境、エネルギーの問題が脅威になっている。西洋を真似るのではなく、伝統を適用させ、意識変革と多彩な専門家を含めて参加型アプローチすることを述べる。日本は、パキスタンの洪水、日本の災害とエネルギーおよびCO_2排出状況、IPCCとCOP27報告を引用し、その対応として、地域は流域を意識した生命圏域と捉える。そのポテンシャルを活性化する新しい社会像を作ることが重要とし、Eco-DRRや地域資源と循環を活かす具体例を提示する。ブータンは地震、鉄砲洪水とサイクロン、地滑り、火災という大災害に対して、建築がどう向き合うか、その対策の具体的事例を提示した。

最後にホスト国を代表してネパールの建築家と研究者が発表した。建築家は環境ユートピア建築で終わらず、現場での課題に対し事例を挙げ、実践的工夫がどれだけできるかが一番必要とされると述べられた。

●2015年ネパール大震災

2015年4月25日、5月12日に大地震に見舞われた。壊滅的被害を受けたカトマンズ盆地内にはカトマンズ市、バクタプル市、パタン市に7つの世界遺産がある。密度は世界一と言われる。復興は進み、各市の宮廷広場は祭りと重なって、子どもたちから老人まで多彩な民族で賑わっていた。

ACGSA円卓会議に集まった参加者

●クォバーカレッジで講演と交流

友人が教える大学でプレゼンテーションを行い、教職員、学生たちと交流する。人口増加するネパールだが、働き手は海外や大都市に集中する。郊外、地方は山や農地の自然環境や地域資産が維持できなくなる日本と同じ状況だと言われた。

（にい てるかず／新居建築研究所）

次世代委員会（ACYA）
SONA International Convention 2023

伊藤友紀（国際委員会ACYA委員）

対面形式のみで開催され、バングラデシュ、ブルネイ、パキスタン、マレーシア、ネパール、インド、日本の7カ国、11名が出席した。テーマは、「Resilient, Adaptive, Sustainable, Innovative, The Next Generation of Architects —回復力があり、適応性のある、持続可能で、革新的な次世代建築家」であった。

●第1部：ディスカッション

若手世代の建築家として今後取り組むべき課題を提起した。昨今の気候変動によって都市環境の変化や首都移転が余儀なくされている現状と、そうした環境に適応していくための課題、若手建築家を取り巻く厳しい労働環境（廉価な報酬、長時間の過密労働が引き起こす心身の健康問題）、建築家という職種におけるジェンダーの課題、これから建築を学ぶ学生や若手建築家が、将来にわたって健全に設計活動を行うことができる環境をどのように整備していくかなど、各国の事例を挙げながら、アジア全体で問題となっている事柄を共有し、解決策を話し合った。

ACYA委員会ラウンドテーブル　ディスカッションの様子

議論をもとに、以下の3つのワーキンググループを組織し、活動案を作成した。

①Resilient: マレーシアは、パンデミック以後の若年世代における建築を学ぶ意欲の低下と経済面での厳しさについて言及し、インドは、建築をビジネスとして成立させるための学習機会を提供するべきとしてセミナーシリーズを提案した。全体として、有益で正しい情報にアクセスできる若者向けのプラットフォームの開発が必要と結論付けた。

②Adaptive: パキスタンは、アルカジア加盟22カ国の若手建築家は、等しく発表と評価の場を与えられるべきとし、バングラデシュは、40歳以下の若手建築家展覧会の各国開催を提案した。

③Sustainable: バングラデシュは、若年世代の自然に対する鈍感さと生物多様性の消失について発言し、ACYAメンバー国において各100本の植樹を行い、エコシステムを促進するプログラムを提案。先だってアジア各地域の生態系に紐づいた植樹マップを作成する。

帰国後は、オンラインベースで各プロジェクトを進めていく。

●第2部：ACYAワールドカフェ

ワールドカフェという会議形式で、委員と現地参加者の14名が、トピックごとに4つのチームを編成し、WSを行った。

ACYAワールドカフェの様子

ルールⅠ 各チームにトラベラーを1名指名し、規定の時刻ごとに移動して、議論に新たな洞察を与える。ルールⅡ 議長が全チームに共通の質問を投げかけ、都度、答える形で議論を修正する。

プレゼンテーションを通して、次世代委員の役割と可能性を再定義し、活動の範囲を拡大する方向へ意識共有がなされた。

①Resilient（パキスタン、ネパール）：気候変動、住宅供給、災害、再利用について議論し、社会的交流の必要性を述べた。

②Adaptive（日本、ブルネイ、バングラデシュ）：維持できないものは適応させ、適応できないものは維持させるという考えから評価システムの重要性に言及し、関係性の方程式を示した。

③Innovative（インド、マレーシア、ネパール）：伝統的手法と未来的手法の比較を行い、過去の失敗事例を再考し知識を共有することが、未来的手法を支えるとした。

④Sustainable（バングラデシュ、インド、ネパール）：サステナブル・テクノロジーとスマート・テクノロジーの対比と協力関係について話し、技術転換を促進するためには、社会的認識と研究および政治や経済との適切なバランスが必要だと述べた。

●SONA International Convention 2023　基調講演

建築家のキーノート講演に加え、テーマによって次々とモデレーターが入れ替わるパネルディスカッションなど、趣向を凝らした多様なプログラムが魅力的であった。アルカジア委員も多くのプログラムに登壇した。現地の若い発表者が、カトマンズで社会問題となっているWaste Managementについて実情を報告しながら問題提起を行ったシーンや、会場で聴講していた建築家と都市計画家がパネリストに対し、ネパールの都市計画の改善について真剣に意見を求めたシーンが印象的だった。現地参加者が、カトマンズが抱える問題解決の知見を得るため、海外から招聘された講演者やアルカジア委員が一堂に会する機会に、いかに大きな期待を持って臨んでいたかということが強く感じられた。

（いとう ゆき／伊藤友紀建築研究所）

SONA International Convention 2023　1日目の様子